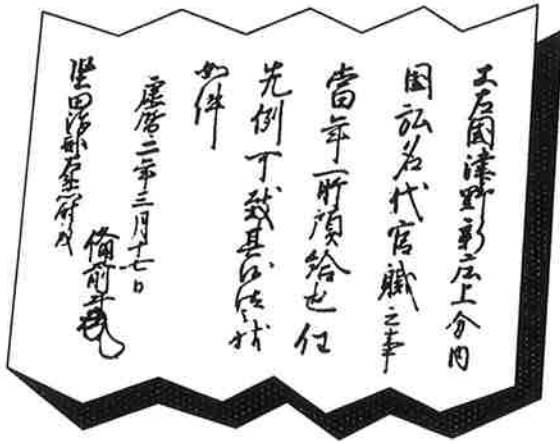


土佐の堅田一族(二)

高知県須崎市吾井郷乙

堅田 貞志



『佐伯文書』

南北朝の動乱

平治の乱より一七〇年余りの時が過ぎた建武三年（一三三五）、九州から再興して、時の天皇の都であった京都を占領した足利尊氏は、持明院統の光明天皇をたて、建武式目を制定し、武家政治を再興した。

しかし当時の後醍醐天皇はこれに屈せず、皇位の正統を主張して皇位を奈良の吉野に移した。

日本の政治は光明天皇を支持する北朝方と、後醍醐天皇を擁立する南朝側との真二つに別れ、全国の武士たちもそれぞれに対立し、各地で抗争が始り五〇年余りにわたる内乱が続いた。これが南北朝の動乱である。

当時、豊後国佐伯荘は七代佐伯惟仲の時代で、本庄一二〇町と堅田村六〇町あわせて一八〇町を相伝し、大友の旗下として北朝軍に属して東奔西走していた。

建武三年には足利尊氏の軍勢催促状が佐伯備前権守惟仲に届き、日州肝付討伐に赴いたが、その軍功によって尊氏が在判の御教書を賜っている。

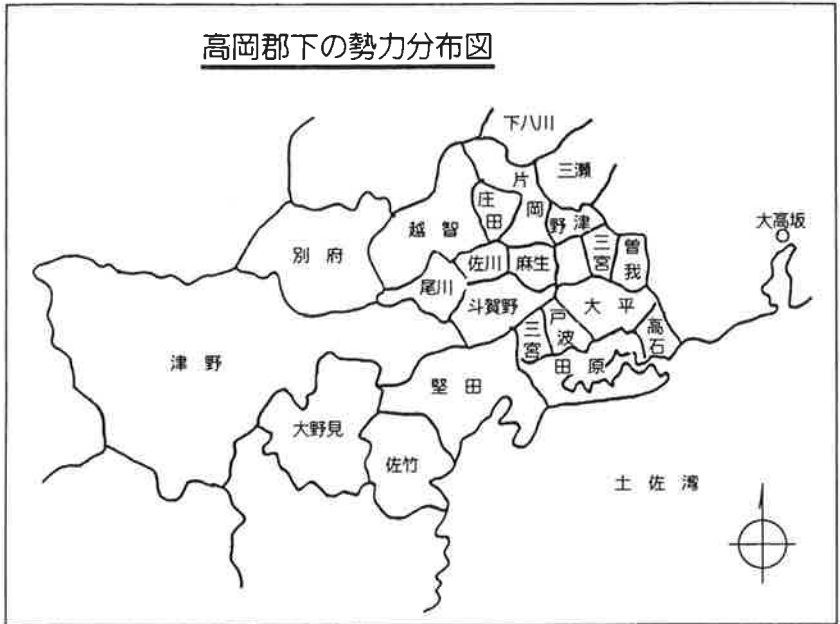
土佐中央部の勢力

土佐の国の中央部・津野大荘の海辺荘には、堅田小三郎という武将が新莊岡本城主として、高南・幡多軍勢の高知への進出に睨みをきかせていた。

讃岐の守護細川定弾は、かねてより建武中興の新政府に不満をもち、幕府再興を願う一人であった。定弾は九州の足利尊氏と気脈を通じ、四国地方への勢力を広げてきた。彼の管領下にある四国に北朝武家に味方する領主が多かったのも当然である。

高岡郡西部の覇者として、長い間その勢力を維持してきた津野大荘・津野孫次郎春高は、その一族・津野和泉守家時と海辺荘主・堅田小三郎経貞と提携し、北朝方に味方した。(堅田小三郎経貞が北朝方に加わった理由には、尊氏と豊後国佐伯氏との関係もあると思われる。)

当時土佐国で北朝方として勢力を持っていた豪族は、東部に細川定弾の弟で、天竺左衛門とその一族の細川兵部大夫氏勝、長宗我部信能、同兼能兄弟、西には津野孫次郎春高、その一族・津野和泉守家時、海辺荘主・堅田治部左衛門尉経貞(小三郎経貞)、子の堅田又三郎国貞(弟



とも云う)、別府莊主・別府彦九郎、吾川山莊主・片岡経義、同直嗣兄弟、日下の三宮左近尉頼国、同実綱親子、同戸波分家の三宮重国、波川の蘇我三郎左衛門、久礼の佐竹義国、同嘉信、そのほか甲斐孫四郎頼秀入道、高石甚兵衛、吉田太郎右衛門、広井左衛門尉俊幸、佐藤六郎入道、八木太郎入道光勝、岡吾郎直嗣等の諸氏が勢い盛んであった。

一方、これに比べて南朝宮方を支持したものは、元弘の乱のとき土佐に配流された尊良親王に親しく仕え、宮方支援を神明にかけて誓った大平弾正光圀を先頭に、蓮池守護・大平敏国とその一族、八幡莊主・河間左衛門次郎光綱、斗賀野又太郎入道光興、三野三郎兵衛光雄、佐川四郎左衛門光顕、越智新兵衛光孝とその兄弟、一族の尾川郷主・近藤大炊左衛門尉知国、その臣・麻生孫九郎智市、浦ノ内郷主・田原六郎入道光俊、同七郎入道秀幸兄弟など大平一族のほか、戸波入道、大高坂左衛門大夫義秀(松王丸)など有力者がそろい、ほかに和食孫四郎、有井亦三郎、海地三郎左衛門、塩海五郎兵衛、泉太郎左衛門などの諸氏が東西にあり、二派に別れての戦乱の渦に突入して行くのである。(資料 八幡莊伝承記等)

佐伯文書とは

南北朝動乱時代の資料はほとんどなく、「佐伯文書」という古文書が唯一の当時を物語る資料となっている。

この古文書は、北軍の武將佐伯(堅田)治郎左衛門尉経貞(小三郎経貞)が書いた軍忠状である。

現在この古文書は、安芸市に住む西岡貫一氏の所蔵する一通と、高知市の見元病院長のお父さんの所蔵せる五通のみ、となっていますが、戦いの動向がよくわかります。

後日、佐川町の明神健太郎が発行した「八幡莊伝承記」などを参考に、この「佐伯文書」を主に物語をつづってみましょう。

浦戸の戦い

建武三年(北朝側延元元年、一三三六)一月七日、土佐の国での南北両派に別れての戦乱の火蓋は切って落された。

土佐北朝の武將堅田小三郎経貞が軍忠状を津野孫次郎家時(津野春高の一族)に送った。

『佐伯文書』

堅田小三郎経貞申 正月七日於浦戸 津野三宮一円
仁致誅罰 守護目代並竹田若党長岡次郎太郎令分捕
切捨一人仕之畢 曾我三郎左衛門尉 大國入道此人々
被檢地之上者 賜一見状可備後日支証候 以此旨可
有御披露候 恐惶謹言

建武三年正月八日

進上御奉行所

佐伯経貞

承了

家時（花押）

「右読み下し」

堅田小三郎申す。正月七日、浦戸に於て津野・
三宮・一円に誅罰致す。守護、目代ならびに
竹田の若党長岡次郎太郎を分捕り、一人切り捨
て仕りおわんぬ。曾我三郎左衛門、大國入道こ
の人々檢地せらる上は、一見状を賜り後日の証
に備えべく候。もつてこの旨、ご披露あるべく
候。

当時の浦戸は、土佐南朝軍の総領とも云える大高坂松
王丸の海上を結ぶ玄関口であり、近畿、九州はもとより、
四国の各領を結ぶ重要な港で、南北両軍ともに今後の作
戦遂行上、絶対に必要な拠点でもあった。

北軍はこの地点を占領することにより、海上権を握る
とともに、海上より援軍を封鎖したのである。もし北軍
が陸路を東進すれば、浦ノ内の田原六郎光俊、蓮池の大
平俊国、北には河間次郎光綱とその一族等の南軍に進路
をふさがれ、一戦も二戦も交えなければ進むことができ
ないのである。

須崎浦より大船団を組み、海路大軍を浦戸に送り、浦
戸を占領することによって、北軍は開戦と同時に大高坂
城（現高知城）に王手をかけたのである。

この戦いで気をよくした北軍は、二月十日別府彦九郎
が伊予北軍の応援を得て、河間一族の越智光孝の居城・
越智の馬ヶ崎を攻めたが、同月十七日、仙立野の戦いで
河間一族に敗北した。

一方一夜のうちに浦戸の城を落した堅田小三郎経貞の
軍勢は、大高坂城を孤立させるために次の作戦を準備し
ていた。

深淵城の戦い

『佐伯文書』

堅田小三郎経貞申 今月十六日押寄深淵城 懸先陣
焼払城郭之所 乗馬太腹被射致軍忠候畢 此等次第
御見知之上者 為後日立証可賜御証判候哉 以此旨
可有御披露候 恐惶謹言

建武三年三月十七日

御奉行所

可一見候畢 頼国（花押）

佐伯経貞

「右続み下し」

堅田小三郎経貞申す。今月十六日、深淵城に
押し寄せ、先陣懸け城郭を焼き払う所に、乗馬
の太腹を射られ軍忠致し候おわんぬ。これらの
次第ご見地の上は、後日証を立てられ、ご証判
賜るべきや。もってこの旨ご披露あるべく候。

南軍の海の玄関浦戸城を打ち破った北軍は、陸路東の
外郎香美郡へと兵を進め、深淵城（旧佐古村、現野市町
佐古）を攻めた。深淵城は大高坂松王丸の伯父、隆秀伊
勢房の關係した領地である。

三月十六日、この城を攻めた北軍はついに城郭を焼き
払い、東よりの大高坂への補給路を断ったのである。

（頼国とは日下領主三宮左近将監のこと）

つづく



土佐南北朝動乱激戦地略図



1	浦戸城戦	建武 3年1月16日	1336年
2	深洲城戦	同 3月16日	"
3	一宮合戦	同 " 18日	"
4	大高坂城戦	同 " 21日	"
5	八幡山戦	同 4月11日	"
6	岩村城戦	同 " 26日	"
7	安楽寺戦	同 6月13日	"
8	斗賀野丸山城戦	同 10月15日	"
9	浦ノ内神崎城戦	同 " 23日	"
10	斗賀野佐川合戦	延元 2年 1月 7日	1337年
11	花園宮土佐入国	同 3年9月11日	1338年
12	大高坂城攻略	暦応 2年12月3日	1339年
13	同 総攻撃	同 3年1月24日	1340年
14	同 落城	同 " 1月25日	"
15	岡本城攻撃さる	康永 1年9月26日	1342年